

【ほしおやじ】

忘れられない思い出よりも、忘れられない物があります。

たとえば、春は、軒先にかかっていた花籠（はなかご）、夏は、軒先にかかっていた風鈴（ふうりん）、秋は、軒先にかかっていた干柿（ほしがき）、冬は、軒先にかかっていた星屑（ほしくず）。

「かいじい、なぜに、うちののきさきに、ほしくずが、かかっているんじゃ」

ぼくがきくと、懐爺は、

「あれはかかっているのではなくて、お星様があそこめがけて、うんこをするんです。あの星屑はお星様のうんこですよ」

「それにしては、いいにおいがするのう」

「お星様のうんこは、香水がわりになるんです」

「だば、おほしさまの、しょうべんは、どんなかおりがするんじゃ」

「それは、つまり、その、いえません」

「なぜに、いえないんじゃ」

「お星様の許可がなくてはいえません」

「いえ、いえ」

「いえません」

「はなげ、ぬくぞい」

「ではいいます。お酒のにおいです」

「なぜじゃ」

「たぶん、お星様は大酒飲みなのです」

「しんじられん」

「ですからほれ、お星様はたまに落ちるでしょ」

「ながればしかい」

「そう、その流れ星。酔っ払って、うっかり足を踏みはずすんですね」

「あほじゃのう」

「あほでなければ、いつもあんな暗いところに、いられませんよ」

ある夜、気味のわるいおやじが家にやってきました。

わけをきくと、

「空から落ちたんじゃ。身体も痛いし、泊めてくれないか」

「どうしておちたんじゃ」

ときくと、

「酔っ払って落ちたんじゃ」

という。

ならば、このおやじはお星様、【ほしおやじ】じゃ。

そうおもって、母親にもそういつて、泊めてあげました。

朝になると、おやじは消えていました。
母親に、
「どうして、きえたんじゃ」
ときくと、
「お星様は明るくなったら、消えるんだよ」